

はじめまして

この号の内容

- 1 はじめまして
- 2 学生の憩いの場
G Square オープン!
- 3 学校の先生をめざす人へ
- 4 なんとなく
- 5 小田健君にとって言語とは何か
- 6 知ることの喜びと悲しみ
自己紹介に代えて
- 7 情報源を使いこなすために
- 8 最近の関心事
研究、猫、ファッション

CRADLE とは？

総合教育研究センターのモットーは「学生サービス」。学生のためにできることを考えた一つの結果が本誌 CRADLE (クレードル) です。

CRADLE とは「総合教育研究センター」の略語ですが、「ゆりかご」という意味もあります。船や大砲を置く「台座」や最近ではパソコンやスマートフォンを載せて、そこで充電を行うなど機能を拡張するためのスタンドを指すこともあります。

学生のための情報誌 CRADLE は、天理大学の学生の「ゆりかご」としてまた「台座」として学生の成長を支えていくために創刊されました。

総合教育研究センターとは？

センターは大学の全学生を対象に次の3種類の科目を提供しています。

- ・専門科目の基礎となり社会に出るための教養を育む「総合教育科目」
- ・教職や図書館司書の資格をとるための「資格科目」
- ・「建学の精神」を実践する科目(「森に生きる」)

これらの科目を担当する教員がそれぞれの思いを持って学生に向けて書いたメッセージが CRADLE です。これからどうぞよろしくお願いします。

CRADLE(クレードル) 創刊1号

2012年5月発行

発行者 伊藤義之

天理大学 人間学部 総合教育研究センター

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

電話・FAX 0743-63-7092 (内線)6111

伊藤義之

いとうよしゆき

担当科目

「基礎ゼミナール」

「森に生きる」

など

学生の憩の場 G Square オープン！

総合教育研究センターに G Square という部屋がオープンしました。

G Square は学生や教員に利用してもらうための空間、場所は研究棟 1 階西側 = 2 号棟側中央付近にあります。G Square の G は General education や Grow up 等の頭文字で、一般教養や成長を意味します。Square は広場です。学生諸君は G Square をどう利用できるでしょうか。

神田秀雄
かんだひでお
担当科目
「基礎ゼミナール」
「基礎からわかる近代史」
など

オフィスアワーを G Square で

勉強のことや学生生活について誰かに聞いてみたい、相談したいと思ったら G Square に来てください。総合教育研究センター教員のオフィスアワーは原則として G Square で行っています。

各教員のオフィスアワー時間帯は、学生手帳の 119 ページ以下参照

(G Square の前にも一覧表あり)

読書や音楽を G Square で

G Square には本や雑誌、DVD、CD が置いてあります。これらを利用することができます。物によっては貸し出しも行います。

「天理図書館」や 8 号棟の「情報ライブラリー」は天理大学の正式な図書館・図書室で、どちらにも多くの図書などがそなえられていますが、G Square では、もっと気軽に図書や情報メディアを利用してもらえよう、助手や教員が対応します。なお G Square には、かつて「音楽」や「西洋音楽史」などの授業で使われたクラシック音楽の CD・DVD を多数所蔵していますので、音楽ファンはぜひ利用してください(学内の他の場所にはほとんどないものばかりです)。

G Square は自由に使える自習室

「天理図書館」や 8 号棟の「情報ライブラリー」は、多くの人がいて敷居が高い(気軽には入りにくい)という人がいたら、昼食時にはお弁当を広げてもかまいませんので、友だちとさそいあってぜひ利用してください。

学校の先生をめざす人へ

上田喜彦
うえだのぶひこ
担当科目
「教育課程論」
「教育方法学」
など

大学というコミュニティやサークル活動などの中で、様々な経験を積む中で、「友だち」や「なかま」とつながり合うことは、実は、先生になるための大切な勉強だといえるわけです。

教職課程とは、簡単にいってしまうと教育職員免許法に定められている学校の先生の免許を取るために必要な教職に関する専門科目を修得するために設けられている課程ということになります。

したがって、天理大学の学生で学校の先生をめざしている人は、教職課程の授業、例えば「教職論」「教育原理」「学校教育心理学」「道德教育の研究」「教育方法学」……といった科目の授業を受けるために教職課程に登録して、勉強に励むことになります。

もちろん学校の先生になるための課程ですから、いわゆる「教育学」の勉強や一般的な「教養」をつけることはとても大切です。でも、実はそれだけでは十分とはいえません。

学校の先生は、教育という営みを通して、子どもたちの成長に介入し、変容を求める仕事です。そのためには、子どもとコミュニケーションする中で、子どもたちを理解し、信頼関係を築くことが大切になります。その意味では、みなさんが、大学というコミュニティやサークル活動などの中で、様々な経験を積む中で「友だち」や「なかま」とつながり合うことは、実は、先生になるための大切な勉強だといえるわけです。

また、学校の先生は、よく「世間知らず」だとか、一般的な「社会常識がない」とかといわれます。それは、学校の先生をしている人は、学校という社会しか目にしてこなかった人たちが多いためではないか、と私は思っています。だって、幼・小・中・高校・大学で生徒や学生をして、勤めたところが、また学校なのですから……。一昔前とは違って、学校の先生も一人前の社会人として自立し、自律していることが求められるわけですから、アルバイトを通じて社会の仕組みを知ったり、社会のマナーを知ったりすることも先生になるためには重要な営みだということになるのです。

とにかく、視野を広く、自分の周りのいろいろなことを注意深くながめ、幅広い勉強をしていくこと、日常を少しだけ教育という視点から省察してみること、そんなことが学校の先生になるためには大切だと私は思っています。

なんとなく

学生のみなさん、天理大学に何を期待して入ってきましたか？「こんな勉強がしたい」、「こんな活動がしたい」、「こんな人になりたい」、「とにかく楽しく過ごしたい」...

え？ただ、なんとなく入ってきた？...そう、それもいいでしょう。僕が好きな内田樹さんもこう書いています。「「なんとなくあそこに行きたい」というのは、脳より先に身体がそっちの方に向いているということ」で、「自分の身体の中で、なぜだか知らないけれど、その学校のその学科のその専門分野のことを学びたいような気がする、という感じを探り当てる」ということが大事だと。

僕も今から十数年前に天理大学に入学したときは、特段やりたいことがあったわけではなかったけれど、なんとなく三国志なんかを読んで、なんとなく中国や台湾や香港のことが気になって、なんとなく天理の街並みに惹かれて...というような、「なんとなく」な学生でした。それがなんとなくつながって、今の研究関心へと広がっていった感じです。

それで、少し考えてみると、僕自身の「なんとなく」の先には、いつも、なんだかわからないけど、なんとなく面白そうなことを話している人がいたり、なんとなく楽しそうにしている人がいたりして、そこにふらふらと誘われてきたような気がします（某先生のゼミに入ったのも、崑崙会で副会長をやったのも、確かそんな感じでした）。

僕自身のそうした経験から、あの場所ではなんとなく楽しそうなことをしている、なんとなく気になることをしている、あそこにいる人もなんだか楽しそうだし、なんだかイキイキしている、なんだかよくわからないけど、なんとなく誘われてみようかな、というような場所に、大学はなってほしいな（教員としては大学をそのようにしたいな）という気持ちがあります。

内田樹さんは、そうしたようなことについて、こう書いています。「何を学びたいかよくわからない高校生たちに対して、彼らが見たことも聴いたこともないような学問分野がある、彼らが経験したことのないような教育方法がある、彼らの日常語彙では語れないタイプの建学理念があるということを告げ知らせることの方が僕はたいせつだと思います。なんだかよく意味がわからなかったけれど、あの旗印に「びびび」と反応したという子たちを、一人二人と拾いあげていくというかたちでしか学校教育は成り立たないと思うんです」。

ここに書かれている「旗印」というのは、「ミッションスクールのミッション」、「ミッション・ステートメント」、もっとわかりやすく「このことを教えたい」という明確なメッセージ」と内田樹さん自身が言い換えています。つまり、なにがなんでも教えたい、伝えたいということをして「旗」として立てて、それを見てなんとなく惹かれて集まってきた人たちに、自分の教えたいことを伝えていく、というのが、学校が存立しうる唯一の形なんだということです。

スペースが限られているので、詳しく書けないのが残念ですが、箸にも棒にも掛からないこの文章を読んで、なんとなく「びびび」と来たら、どうぞいつでも聞きにきてください。あんまり役には立たないかもしれないけれど、みなさんに教えたいこと・伝えたいことが僕にはあります。あるいは、僕に対して「びびび」と来なくても、大学にある他の何かにみなさんの中にあるセンサーが反応して、なんとなく惹かれていくことで、学生生活が楽しく有意義なものになればいいなあと思います。

ちなみに、引用した内田樹さんの文章は、『最終講義 生き延びるための六講』（技術評論社、2011年）という本に収録されている、「ミッションスクールのミッション」という文章によるものです。これもなんとなく惹かれたら、読んでみてください。

山本和行

やまもとかずゆき

担当科目

「学校教育社会学」

「教育原理」

など

僕自身の「なんとなく」の先には、いつも、なんだかわからないけど、なんとなく面白そうなことを話している人がいたりして、そこにふらふらと誘われてきたような気がします。

小田健君にとって言語とは何か

小田健

おだけん

担当科目

「基礎ゼミナール」

「社会と人間3」

など

ベルファスト市民は本当に（呆れるほど）お人好しであった。道ですれ違うときには必ずにこやかに挨拶をするし、おじさんこと私が路上で地図と格闘していれば、若い女性が駆け寄って「どこ行かはこの」と尋ね、教えてくれる。

平成 24 年度の春学期は「檻の中」から始まった。もちろん、「檻の中」と言っても本物ではなく、周囲を遮蔽され、身動きのとれない状態で 11 時間前後アムステルダム到着まで座禅を強いられるという意味での「檻の中」である。

今年のイギリス政治学会は北アイルランドのベルファストで開催された。子供の就活に付き合わなければ、とか子供の入社式前後は家に居なければ等々のしげろみひさしぶりに一つもない近年珍しい 4 月だったので、8 年ぶりになるうか、思いついて地球の裏側まで長駆見学（学会参加）に出かけることにした。

それにしても 60 過ぎの歳で 11 時間の缶詰め状態はきつい。おまけに、ベルファストまでは、アムステルダムとパーミンガムの二カ所で乗り継ぎをしなければならず、その待ち時間も長い。さらにおまけに、パーミンガムからは私以外全員白人。この状況は、これまたこの歳で 8 年ぶりに経験する身としてはやはりきつい。

そんなこんなで、現地時間夜の 9 時過ぎにベルファスト空港、10 時過ぎに宿舎にたどり着いたときには、身体はくたくたで、精神は「鬱」。おまけに外は冷たい雨。「泣きっ面に蜂」ではないが、まさしく「鬱に氷雨」。明日からどうなることやら。

学会初日は、現地日時で 3 日の 9 時。冒頭は、日本の学会で言う「共通論題」で、参加者ほぼ全員が集まった。この「共通論題」には、ブレア政権時代の内務大臣デイビッド・ブランケット David Blunkett が報告者に名を連ねていた。現職の下院議員にして、元内務大臣の要職にあったような人物が、政治学会の一参加者として報告し、あるいは色々なセッションに参加するというのは、日本の政治学会、選挙学会でも近頃はたまに見かける光景であるが、政治家が政治学者の使うような概念や理屈を駆使するというのはさすがに本場と言うべきか、感心した。

私はと云えば、その後続くセッション（まあ、つまみ食いの選択である）でもっともらしい風体で参加したわけだが、何しろ英語が聴き取りにくい。あるいは、全く聴きとれない。しかし、そこはそれ、11 時間の座禅の効験というか、90 分程度分かったフリをして座っているのが苦にならなくなっていた。摩訶不思議。とは言え、みんなが笑っている箇所でも笑えず、みんながわれ先に質問する中で、笑わず騒がず、ひたすら黙っているのは、これまた座禅に類する苦行というか、むしろ屈辱である。この出しゃばり人間がひと言も発言できないとは！

しかし、「地獄に仏」は大げさだが、ベルファスト市民は本当に（呆れるほど）お人好しであった。道ですれ違うときには必ずにこやかに挨拶をするし、おじさんこと私が路上で地図と格闘していれば、若い女性が駆け寄って「どこ行かはこの」と尋ね、教えてくれる。私より 20 歳くらい上のおじいさんにも助けられた。この点、ロンドンやエジンバラでも全くそういうことがないわけではないが、やはりそこにはある種の racism の臭味がただよっているような気がしたものだが、ベルファストにはそれがなかった。いっそのままこの地で生活できたら、なんてことまで考えるほどであった。

（6 ページへ続く）

知ることの喜びと悲しみ 自己紹介に代えて

おかげさまでどうにかこうにか天理大学での教員生活 1 年目を終え、この 4 月から 2 年目に入った池田華子です。教壇に立つ際は、いまだに緊張の連続。周りの先生方にも、学生さんにも助けられてばかりの毎日です。

思えば、18 歳で親元を離れて、大学生活をスタートさせてから、早 10 年以上。随分と長い時間がたったものです。大学入学当初は、まさか自分が大学院へ進学し、10 年近い年月を大学（院）生として過ごすことになるとは想像もしていませんでしたし、ましてや天理大学の教員として教壇に立つ日が来るなどとは考えたこともありませんでした。

子どもの頃から何かを知ることが好きでした。新しい言葉を覚えたとき、新しい感覚を知ったとき、そこには何にも代えがたい驚きと喜びがありました。やがて図書館通いが日課となり、ちょっと背伸びした気分で、古今和歌集を手にとったのは 13 歳の頃。「鶯のこほれる涙」で冬の寒さを表現する、その繊細さに触れた時の言いようのない驚きと喜び！それは知る喜びの原体験の 1 つとして、私の中に永遠の記憶として刻み込まれています。

いつしか知る喜びは私にとって自然のものとなっていました。しかし、人生には思うに任せないこともあります。理不尽な災いをもたらされることもあります。そこで知る悲しみは、幼い頃から親しんできた知ることの別の側面を明らかにするものでした。

知ることの悲しみ、知ることの苦しくなる。それすらも含めて、知ることの力を信じることができるか。学生時代にシモーヌ・ヴェイユの思想と出会い、その研究を続けてきて思うのは、ヴェイユがそれを信じる人の一人ではなかったかということです。人生の悲哀、人間の不幸に、清澄な注意力と大胆な行動力とで対峙したその姿には、知ることを選んだ人の矜持が感じられます。

知ることの喜びと悲しみ、その両方を大切に、この 1 年も充実した年となるよう、1 日 1 日丁寧に過ごしたいと思う今日この頃です。

池田華子

いけだはなこ

担当科目

「道德教育の研究」

「教育原理」

など

子どもの頃から何かを知ることが好きでした。新しい言葉を覚えたとき、新しい感覚を知ったとき、そこには何にも代えがたい驚きと喜びがありました。

（5 ページ 「小田健君にとって言語とは何か」の続き）

それにしても、今回の渡英の主たる目的はあくまでも学会参加である。その主目的のところで言語の壁に阻まれるとは！いやはや。Catching English seems to be much more difficult than studying political science では洒落にならない。しかし、何かしら今回の出張は充実した。ベルファスト市民のホスピタリティもあるが、やはり、研究会での英語のやりとりを聴くのは楽しい（理解できない部分が多いのが難点なんだが）。イギリス人の英語は美しい。音楽のようである。一種の芸術だといって言い。そう言い出せば、どの言語も聴いて美しいものかも知れない。何を言っているのか分からなければ分からないほどその言語は美しい。こないだ亡くなった吉本隆明に『言語にとって美とは何か』てな本があったが、何十年前かに読んだきりでなかみを忘れてしまったので今一度読み返してみるとしよう。

情報源を使いこなすために

古賀 崇

こがたかし

担当科目

「情報サービス論」

「図書館サービス特論」

など

天理大でも OPAC に便利な機能を付け加えたり、また大学の PC 端末から有用なデータベースを使えるようにするといった取り組みをしていますが、まだまだ学生の間には浸透していない、という印象です。

この 4 月に図書館司書課程担当の教員として着任致しました。まさに現在、天理大での「ファースト・イヤー」の中で奮闘しているところです。これまで、国立情報学研究所（WebcatPlus や CiNii の運営元）と京都大学附属図書館に籍を置き、大学図書館や「研究成果としての文献」の流通にかかわる業務・研究を行ってきました。

さて、この最初の学期で担当している授業の中で、受講生の皆さんが辞書・事典・データベースなどさまざまな情報源をどのように利用しているか、聞いて回っているところです。今の時点では、基礎ゼミや専門の授業などを通じ、有用な情報源の存在や活用法に「たまたま」めぐり会えた人もいれば、そうでない人もいる、と感じています。

天理大でも OPAC に便利な機能を付け加えたり（「詳細検索」で「分類表による番号検索」「関連索引による番号検索」を試してみてください）、また大学の PC 端末から有用なデータベース（辞書・事典類を集積した「ジャパンナレッジ」、朝日新聞記事を探せる「聞蔵」など）を使えるようにするといった取り組みをしていますが、まだまだ学生の間には浸透していない、という印象です。これからは授業などさまざまな場で、学内のもの・学外のもの、またウェブ上で無料で使えて信頼性もあるデータベースも含め、学生生活や卒業後の社会生活のために活用できる情報源の使い方をアピールしていければ、と思っています。私の授業を履修していない学生の方も、気軽に声をかけて下さい（オフィスアワーは火曜 2 限です）。

なお、「情報源の使い方」について、もう少し細かいことは共著書『研究ベース学習』（コロナ社、2011）に書きました。八号棟情報ライブラリーにもありますので、興味のある方はそちらで読んでいただくか、私まで連絡下さい（と、最後に宣伝）。



最近の関心事 研究、猫、ファッション

専門は、憲法、行政法、ドイツ法が建前である。大学院時代から、社会保障行政・環境保護行政と基本的人権（社会権、環境権など）を研究してきた。ドイツの法制度・理論と日本のそれを比較検討するという手法で、研究活動を行ってきた。関心事は、ジェンダー論や家族、男女平等、そして最近はEU研究や動物保護へと広がってきている。いま、何が専門なのですかと問われたら、まちがいでなく「EUにおける動物保護、環境保護、とくにドイツにおける動物保護の動向」と答えるであろう。

このような訳で、言語はドイツ語を使用している。学生から、「先生はドイツ語も教えているのですか」と訊かれるが教えてはいない。ゲーテというドイツ語学校で中級課程を終了し試験にも合格しているだけである。近年は、ヨーロッパ共通のドイツ語能力試験になっているが、それだとC1を終了しその終了試験に合格した者とみなされるようである。このレベルだと、ドイツのほとんどの大学で入学資格が認められるようである。

さて、動物保護のテーマに話題を移そう。日本は、動物保護に関してEUの「動物保護先進国」と比べて残念ながら遅れている。とくに、犬猫の「殺処分」は、年々減少しているとはいえまだ約28万匹・頭が年間殺されているのが現状である。この現状は、たとえば、ドイツ人には驚かれる内容である。ドイツでは、原則「殺処分」はないからである。捨て犬・猫などは、Tierheim（動物保護施設）で保護され多くの動物たちが貰われていく。なかには、一生涯施設で暮らす犬猫もいる。

今年度は、「社会と人間2」という授業でもこの問題を扱う。また、夏には、ドイツへ行きドイツや他の国の動物保護の現状を調査研究してくる予定である。いずれは、「動物保護と法」というテーマで新書版の本を執筆する予定である。動物、とくに猫を愛し、メルセデスに乗り、アルマーニを着こなしている教員が何を隠そうぼくである！

PS, 写真の猫は、すべて捨てられた猫である。知り合いから譲り受けた。



浅川千尋
あさかわちひろ
担当科目
「基礎ゼミナール」
「社会と人間2」
など
